

論文提出者氏名 木村周平

本論文は、トルコ・イスタンブールを拠点として、地震をめぐる科学的知識と、行政組織、そして住民による自発的な組織の生成のあり方を、長期的なフィールドワークに基づいて分析した民族誌的な研究である。この論文では将来災害が予想される地震についての科学的予測を中心として、関連する地震学者、行政、そして住民がその未来に対して、いかに反応してきたか、その過程が詳細に記述されている。

人類学的な文脈における災害研究は、被災地の文化的特性を強調する議論が主流であり、それに対しコミュニティという概念が対抗する枠組みとして浮上してきた。しかし木村氏はこの概念がもつ固定的な性格を批判し、未来に向かって開かれた特徴をもつ集団として社会体という概念を提唱する。この概念を軸に、本論文では、地震学、行政、住民組織という大きく分けて三つの部分の相互関係が分析の対象となる。第1部は地震学者の活動、地震測量所における地震学的知識の構成およびその伝播のプロセスが詳細に記述される。トルコにおける地震研究所の日常的活動が描写されると同時に、そこで生じる地震学的知識がメディアを通じて独自の変容をする様子が興味深い。第2部はそれに対応した行政側の対応（都市計画、トルコ都市部における人間関係、行政を中心とした防災教育のあり方等）が描かれるが、行政の重要性が強調されるのにも関わらず、木村氏の調査によれば、その活動はさまざまな問題をもたざるをえない。そして第3部ではこうした行政組織とは別のボランティア組織が自発的に立ち上がってくる、そのダイナミズムが詳細に記述される。

本論文は、従来の人類的な災害論が、比較的閉じた農民社会をモデルとして、そこにおける脆弱性やコミュニティの自律性を強調してきたのに対して、その基本概念を一新する新たな構図を打ち立てようと挑戦している。そのための観察拠点を、地震学、行政、そして住民組織と複合的に設定して、それぞれが相互作用するあり方を、民族誌的な細密さやトルコ社会の独自性を見失わずに記述しようと試みている。この試みにおいて、従来の災害研究の限定された枠組みを大きく革新する可能性があるという点で審査員の意見は一致した。また科学史の観点からいっても、従来の行政中心の防災対策から、新たな住民中心の活動への転換点として、1999年の災害が特定され、その歴史的な役割とインパクトを科学的知識と絡めて分析した点が高く評価された。また組織論的にも、災害にまつわる社会的編成の問題を、過去における歴史的なコミュニティの形成ではなく、未来に起こりうる事象を中心として編成されるもの、として論じるというのは、新たな観点であり、住民組織だけでなく、政府の働きや情報の流通の仕方への着目も高く評価された。

いくつかの問題点も指摘された。特にブルデューによる社会体 (corps sociaux) という概念が、果たして新たな理論的認識を導きうるのか、それとも単にボランティア

集団、NPOといった都市型のゆるい組織体を総括しているにすぎないのかは、判然としない点もあり、この点についてはさらなる理論的な彫琢が必要であろうとされた。また地震学を中心とした科学者集団についても、トルコでの彼らの歴史的、文化的な特性や社会的地位の分析が不十分であり、更なる探求が必要であるとされた。また中東の社会人類学的な研究史の背景からいえば、トルコ社会を含めたより伝統的な社会集団や社会関係のあり方と、ボランティア型集団の関係、あるいは科学的知識を受け止める社会側についても、学歴による理解の違いや、階級格差といった問題等も、これからの課題として残された。

こうした指摘はあったが、全体としては、木村氏の論文は新たな領域に果敢に挑戦する刺激的な論文であり、今後の可能性も大きいものであるという点で審査員の意見を一致した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。